

---

# 天地物語

重装改

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天地物語

### 【Nコード】

N6167Y

### 【作者名】

重装改

### 【あらすじ】

いつか、どこかでさらなる技術的進歩を遂げる事ができた人々と、できなかった人々。

彼らが時には憎み合い、時には愛し合う、そんなお話。

文章に粗があった時は、是非ご指摘お願いします

## ブローグ

いつの時代ともわからないいつか、人は様々な技術を産みだした。

大陸サイズの人工島を浮かび上がらせるほどの反重力エネルギー。太陽光と定期的なメンテナンスだけで半ば永久的に食料、エネルギーを生み出してみせるプラント施設。

これら以外も含めた様々な技術は生活に転機を与え、医療面でも反老化カプセルを始めとした恩恵により平均寿命はさらに高齢化した。

これらを手に入れた人々はまさにこの世の春を謳歌したといえよう。

しかしこれらの技術は、軍人将校、政治家やそれに追随する職業に就く者、高所得者等の特権階級に独占された。

その他の人々は変わりないどころか、むしろ参政権を始めとする様々な人権の事実上の消滅でそれによる治安の悪化が深刻化した。

何より反重力エネルギーの発生時に老廃物、通称 黒い雪 による環境汚染等による生活圏の縮小で今まで以下の生活を余儀なくされていた。

そんな中、一人の学者が駆動システムの革命になりえる物を開発した。

物語は、その評価試験に呼ばれた人々を載せたシャトルに焦点を合わせた状態から、始まる。

## 一話（１）

何の変哲も無い旅客機が、空を飛んでいる。いや、正確には着陸のために降下を開始していた。

乗客の顔ぶれは三十代、四十代が二、三割、残りは十代後半に見える人々が占めている。

彼等に共通していることは緊張と不安が入り乱れた形容し難いピリピリとした雰囲気、そして胸に付いた 天上の人、つまり特権階級を表すバッジである。

一方、同時刻

その旅客機を見上げる二人の人物がいた。

片方は肩までかかる髪を後ろで束ねた背の高い青年、もう片方は金髪と黒い肌が目を引く中肉中背の少年といったところか。

「博士、質問です」

少年が青年（どうやら博士と呼ばれている）を見上げて言った。

「これから来る人って１００人ちよつとであつてますよね？」

「そうそう。君と同じ年頃の子達はだいたい７０人かな」

博士は少年に笑いながら返す。

「全員、適性 も君より上だ。それで、どうしてまたそんなことを？」

少年は頭を軽くかき、（ばつが悪いが恥ずかしいかの時に少年が無意識に行う、一種の癖である）これまた少し恥ずかしそうに答えた。

「いや、そういうわけじゃなくて、えっと…俺は 下の人 だけど、その人達と仲良くなれるかな、なんて」

「つまり、差別されるのが、怖い」

「ええ、まあ…」

博士は、少し考え込んで答えた。

「わからないな、ただでさえ特権階級とただの人だ、さらにさつきも言った通り、

彼等と君とは歴然とした才能の差がある。でも」

「でも、何です？」

「天上の人といっても人間さ、全員が選民思想ではないかもしれない、い、そうであるべきだ」

少年はそれを聞いて少しだけ気持ちが落ち着いた。

博士のこの言葉は何だか博士自身に語りかけている風にも見え、少年は博士のそういった口ぶりは幾度と無く見てきた。しかし、たとえリップサービス程度でも、言葉を投げ掛けられないよりはずっとと幸せに違いないと考えた。

これは少年の持論でもある。

「おや、着陸したね。行こうか」

「は、はい」

返事をしながらも手の震えが止まらない自分を少年は非常に情けなく思った。

反重力装置から排出される有害廃棄物、通称 黒い雪 のせいで地上に住むことを余儀なくされた人々は、シェルター兼居住区として巨大なドーム内に生活に必要な全てを詰め込んで閉じこもることを選んだ。

しかし、ドーム自体の維持費が馬鹿にならず、またそのような閉鎖空間で出来る産業などたかが知れている。

結局彼らは天上の人に頼らざるを得ず、両者の立場の差は開き嫌悪感は深まるばかりであった。

旅客機は、島の海沿いに位置したドーム内に着陸した。

といっても、まずは 黒い雪 処理として旅客機全体の消毒作業がある。そして乗客にも厳重な処理は行われる。

結局、乗客達がロビーに解放されたのは着陸から30分以上後のことだった。

ドームの外壁と内壁の間の半ば儀式と化したこの洗淨時間。天上都市民にとってはドーム民に一刻かしまることを強制されているような不愉快な時間。

また、ドーム間の交通や運送すらほぼ不可能なドーム民にとっては、洗淨用の水を初めとする貴重な資源や資金を捨ててまで憎い天上都市民を招かなくてはならないという腹立たしい時間であり、このような状況はドームと天上都市の関係が全く好転しない一因である。

旅客機にいた中の半数ほどがそういった不愉快な感情を抱いた頃に、博士と少年がようやく到着した。

## 一話（2）

向かってきた二人が博士と少年である事がわかった、百数人の先頭から三十代そこそこに見える男が前に出た。

「桜田です。芦岡博士で間違いありませんね？」

「はい、よろしく願います」

お互いに軽い挨拶を交わすと、桜田と名乗った男が博士に不安げに質問した。

「博士」

「…何です？」

「そちらの子供は？」

博士は桜田の手の先の少年を見て、ああ、と納得したように声を出した。

「彼は、今回の計画で先だって試験に付き合ってくれたのです。名前は…」

そこで博士は急に口ごもる。心なしか視線も泳いでいる。

「…博士？」

「いや、ちよつとお待ちを。」

博士は桜田に背を向け少年に向き直る。

「そつえば俺は君のこと名前で呼んだこと無いな？」

「そりゃあ、名前ありませんし」

「……そうだっけ？」

「博士も博士ですよ。俺と博士の二人つきりが十年続いたからって、何も全部 おい だけですませなくても。なんなら、今にでも付けちゃいます？」

あつけらかんという少年をよそに、博士は頭を悩ませていた。

「名前、名前ね。そうだ、せっかくだから おい をなまらせて口イでどうだ？」

これに少年、

「ああ！いいですね、ロイ。」

目を輝かせて実に嬉しそうに賛同する。

「ふふふ、そうだろう。たったの二文字で覚えやすい。」

「あの、博士そろそろいいですか？」

「えっ？ あ、っと」

博士は、桜田に声をかけられてやっと頭の中で自分の来た理由まで話を戻す。

「コホン、と、とにかくテストパイロットを担当してくれたロイ君です。」

「よろしく願います」

「は、はあ……」

啞然とする桜田をよそに、博士は明らかに自分を変なものでも見ているような目で見ながら、ヒソヒソと話をしている人ばかりを見つめると、再び視線を桜田に移してズイツと詰め寄り、小声で不満を漏らした。

「しかし、桜田さん。事前に伝わったから何とかありましたけれど保護者用にSPが同伴するだなんて、遠足じゃあ無いんですから」

「す、すみません。それでもだいぶ減っているですよ、ただ、さすがに自分は権限が低くてですね……」

桜田は急に真面目な話、それも自分にとって痛いところを振られて苦い顔をした。

そうでなくても彼と長身の博士の身長差は十センチ近くあるため、ズイズイ寄られるのはあまり気持ち良いものではない。

「いえいえ、こちらこそ。そろそろ移動しましょう、これ以上待たせると皆さん、アレですから」

博士は彼の内心を知ってか知らずか、申し訳なさそうな顔をして深々と頭を下げた。

「そ、そうですね」

桜田は話を長引かせた元凶は博士であることを指摘したかったが、それこそ面倒なことになると判断し、人だかりに向き直った。



「では皆さん、こちらです」

桜田、博士、ロイを先頭に約百人が目的の施設に向かうためリニアレールに乗る。

レールはドームの内壁に向かって移動を開始し、何かあるたびに桜田がドームの構造についてのウンチクを語っていた。

博士にはあるものと無いものがある。

あるものとは発想力。

無いものとは金とコネと交渉の才能や常識、その他諸々である。

（今自分がこうやってドームで研究をできるのも、こういう人達の財力や桜田さんの根回しのおかげ。無茶への妥協はやむを得ない、か）

ほとんど誰も聞いていない解説を何故かしている桜田を見ながら、博士は色々思いの詰まったため息をついた。

## 一話（3）

そしてリニアは遮断層を抜けてドームの中に出た。

ドームの中では比較的小型だが、それでも東京都の市区部ほどの直径のドームの中には建物が並んでいた。

それはまるで「野球」のドームを二、三個並べたほどの敷地分はあった。

（なお、野球自体は黒い雪とそれ対策のドーム社会によって都市間の長距離移動が困難になったなど、悪条件の重なりで非常に残念ながら廃れてしまった）

しかし、それ以外には緑地以外は更地や岩山が広がっているだけで、どちらかと言えばそれしかない、といった感じである。

「ああ、説明いたします。このドームは元は皆さんのレジャー施設等の建設を目的としていましたが、浮上都市のライフラインの確保に伴い不要と判断され放棄されていたところを…」

当然、仮にそんな物が出来ていたらドームと天上都市の全面戦争が起きただろう。

博士は、桜田がある種めちゃくちゃな光景に目を丸くしていた人達に説明しているのをすぐ隣でぼんやりと聞いていた。

だが、これまたすぐ隣のロイがやけに神妙な顔をしているのに気づき、軽く声をかけた。

「ロイ、どうした？」

ロイはよほど深く考え込んでいたのか（それとも、さっそく名前を忘れたか）全く反応が無かったが、もう二、三回呼びかけてようやく気づくと、やや恥ずかしそうに頭をかきながら答えた。

「その、迎えに行く時と思いましたけどドームって広いですねえ」  
博士はそういつてため息をついたロイに少し笑いながら

「君、ドームなんかを広いと言ってしまったら地球を見たときひっくり返るぜ？」

と返したものの、ロイを施設の一つのブロックから十年間出していなかったのは他でもない自分だったことを思いだした。

そしてロイの態度に内心で舌を巻きつつ、そんな自分の無頓着さがロイをこんな風にしてしまったと考え、少し嫌な気分になった。

「あのさ、ロイ」

彼はせめて何か言うべきかと思って一声かけようとした。

「つきました。保護者の方は会議室で博士と私から今後の説明をいたします。えっと、試験に付き合って貰う生徒だから……うん、被験生はこのロイ君についていって寮の入口まで向かって下さい」

桜田とリニアに完全にタイミングを持って行かれた。

「さあ博士、行きますよ。どうしました？」

「いいえ、何でも」

桜田を尻目に腕時計を見て、相手方のスケジュールもあるかな、と考えた博士はロイのことは残念に思いつつひとまず置いて会議室へ向かうことにした。

会議室では博士と桜田が、半ばおさらいに近い形で保護者方に説明をしていた。「パンフレットを読んでいただいたように、私が研究しているのは、人と機械の一体化です。といっても詳しい話は直接見てもらってからの方がいいかも知れませんね」

そういつて博士はそばに置いていたヘルメットを被り、すぐ隣の部屋までの敷居を桜田に外してもらった。

そこにはトラックより大きそうな腕があり、それを見せると、頭頂部から出ていたコードを何本かを端子に繋いだ。

「では、いきますよ……！」

自身の手を強く開いて、握るという動作を繰り返した。すると、

『ギギッ、ギギギギ……』

と駆動音を鳴らしながら腕の手もほとんど同じタイミングでそれが続いてみせた。

「ハア、ハア、ハア……まあ、こんなところですね」

と、博士がやや疲れた顔をして振り向いたのと保護者席から、お  
おっ、と驚きの声が漏れたのも、これまたほぼ同時だった。

## 一話（４）

博士が保護者に 腕 の動きを見せていた頃、ロイは地図を片手に被験生の先頭で寮へと歩みを進めていた。

「あつと、ここは曲がるのか。桜田さんてば、人が言う前に博士連れてっちゃんだからさ」

「なあ」

「えっ？」

ロイが地図と睨み合ってうんうん唸っているところに、一人の青年がやや小声で話しかけてきた。

少し赤が混じった黒い髪と白い肌、赤みがかった瞳が特徴のその青年はロイと地図を交互に見比べてやや不審そうな顔をしていた。

「お前、さっきのテストパイロットだろ？」

「えっ、ああ、そうだよ」

「もしかして道を忘れたとかか？」

「えっ！ ああ、うん。ここは初めて来たからなあ」

「初めて、ねえ。テストパイロットなの？」

ロイの挙動不審な様子に青年は興味を抱いた風で、またそんな青年の興味深そうな態度にロイはさらに戸惑った。

「いや、パイロットだからって行ったことのないのはどうしようもないよ？」

ロイが思い当たる限り至極真つ当な返しをし、とりあえず話題を終わらせようとしたところ青年は

「…ああ、それもそうか」

と、思いの外にあっさり食い下がったので、ロイは安堵するやうな気がでないやらでますます緊張した。

「まあ、そんなに入り組んでないから問題は無いと思うよ。……たぶん」

「信用ならないな、どれ見せてくれよ。って今この辺なのか。なら

「1分もしないで到着するんじゃないか」

「あつ！そうだね。地上と地下で縮尺違うのかなあ」

「地、なんだって？」

「い、いやあ何でも！ あ、見えてきた、あれじゃないかな」

「？ まあ、いいけど」

寮は、一目見た限りは三階建ての何の変哲もないホテルかアパートといった感じのものだった。

しかし、

「誰もいない？」

掃除された痕跡はあるものの、人の気配は感じられなかった。

「みたいだね。おや、何かロビーにあるぞ」

そういつて青年が向かったロビーには箱らしきものと、それを矢印で指して『一つ引いて下さい』という文が書かれた建物の見取り図があった。

「くじ引きか？」

「くじ？ ああ、博士から聞いたことがあるぞ。でもなんで今くじ引き？」

「たぶん部屋でも決めるんじゃないかな。さて、よいしょつと」  
青年は箱の穴の中に手をつ込み、3aと書かれた小さい玉を一つ取り出した。

「ふむ、3aね。よし、お前も一つ取り出せよ」

「えっ？ ああ、わかった」

ロイは青年に続いて箱から玉を取り出した。

「3cって書いてある」

「ふうん」

「ああ、同じ部屋じゃないか」

「ホントだ。よろしくな、パイロット君。」

「よろしく、んっ？ 『くじを引いた人は番号通りの部屋の中でお待ち下さい』、だってさ」

「なるほどね。ちょうど長い道と若干頼りないガイドのせいで疲れ

ていたところさ。どれ、ちよつと部屋を見てみるか」

「そうだね、俺も見たい」

青年が皮肉を言ったことを知ってか知らずか、ロイも後に続いた。

## 一話(5)

青年とロイが入った部屋は、二段ベッド二つ、バスルームに洗面台と良く言えばシンプル、悪く言えば殺風景なものであった。

「ベッドが四つなら、あと二人つてことかな」

「さあね、くじは俺がa、お前がcだから最低あと一人は来るな」  
「なるほど」

そう軽く雑談を交わし、互いにとりあえず残りを待つことにした矢先。

「やあやあ、なかなかどうして殺風景ですね」

「まあ、わ……コホン、僕にはこれくらいがちょうどいいけれど」  
開け放したドアから、背が高いのが一人と低いのが一人、計二人が入ってきた。

「おや、いらつしゃい。これからよろしく」

「あつ、よろしく」

間髪入れずに挨拶した青年に続きつつ、ロイは入ってきた二人をそれぞれ見比べた。

背が高い方は金髪を耳ほどで不格好にならない程度に切り揃えた、空色の瞳をした青年。

低い方は、黒い髪を後ろでまとめていて(博士と違って前髪はそのまま、後頭部で縛った感じ)何となく丸みを帯びた顔立ちが中性的に思わせる少年だとロイは思った。

「別に、仲良くはしたいけどさ」

少年の方が口を開く。

「僕は今のところ、ここにいる全員の名前を知らないのだけれど」

「ああ、なるほど、確かに名乗っていなかった。」

少年に赤みがかかった黒髪の青年が相槌を打ち、では俺から名乗るよ、と皆に確認をとった。

「じゃあ、言うぞ。俺はオニキス、オニキス・ブラッドレイ。これ



からよろしく！」

それに金髪の青年が応じる。

「僕はケイズ・エイウスです。口数は少ない方ですが、まあ仲良くやっていきましょう」

「わ……僕は宇佐美・駿河<sup>つさみ・するが</sup>だ。よろしく」

オニクス、エイウスに続いて少年が名前を名乗り終えて、いよいよ自分の番かと意気込んだ直後、ロイは妙な違和感を覚えそれを口にした。

「みんな、名前長いな？ 特にオニクスブラッドレイなら十文字もするじゃあないか」

ロイを除く三人と周囲の空気が固まった。

（えっと、うん。……うん？）

（ちよつと何を言いたいかわかりませんね）

（これは素なのか？ ボケなのか？ わ、私には察しかねる）

三者それぞれ、だいたい同じことを考えて静寂が生まれてしまっただが、居心地が悪いのか空気を読んだのか、とにかく駿河がロイに質問することで切り抜けようとした。

「姓名とか、ファミリーネームと違って、わかるか？」

「？ 何だい、それ」

再び静寂。

「あ、ああ知らないのか。いやあ別に悪い事ではないんだ」

「うん。そのファミリー……？」

「ああ、ようするに、家族としての名前というか、何というか……ええい、エイウス君頼む」

「いや、駿河さん。僕の家はいろいろややこしいのでここはあなたが」

「奇遇だな、私も色々ややこしい家庭なんだ。じゃあオニクス君、がんばれ」

「お願いします」

「なんちゅう理屈だ！ だいたい、わざわざ自分の家庭の話を詳し

くやらんでも、適当に話せばいいじゃないか」

「……」

驚愕するエイワスと駿河。

（こいつら絶対アホだ……）

そして頭を抱えるオニクス。

「まあ例えば、俺のフルネームはオニクス・ブラッドレイでオニクスは俺の名前だがブラッドレイは、家族の名前ってやつだ。例えば俺の親父はガーネット・ブラッドレイ。自分の名前がガーネット、家族の名前がブラッドレイ……わかったか？」

「まあ、たぶん」

オニクスは一応ホツとため息をつきつつ、なんでこんなアホ共に一喜一憂しなければならぬのかと軽く自己嫌悪に陥った。

と、その時オニクスはそもそも彼の名前を聞いていないのを思い出した。

「そういえば、お前はなんて名前なんだ？」

「えっ？ えっと、あー、うん！ 思い出した、ロイだよ！」

三度、静寂。

「あー、えっと、思い出す……？」

「いや、ハハハ、さっき名付けてもらっておいですぐ忘れるのも変な話だな。いや、でも違うんだ！ 皆の案内やいろいろな忙しかつたじゃないか、結構時間もたつたし、ねえ？」

腕時計をチラチラ見ながら論点からズレにズレた弁解をするロイに、同時に三人が啞然とした。

「……さっき名付け……え？……」

「そう！ まあ仕方ないんだ、これは……」

再びロイが弁解を続けようとしたが、その時オニクスが形容し難い物をみたような顔をしながら遮った。

「もういい。その、何というか、流れについていけない！」

「あー、オニクス君に賛成です。ひとまず他の話をしましょう？」

「……うん、そうだ、駿河やエイワスにだって聞きたいことはある

さ」

エイワスに促されてオニキスはひとまずロイから視線を逸らしたが、視線に重なった駿河を見てふと気になったことを思い出した。「ところで駿河、お前一人称が『私』になってたぞ？」

「えっ。こ、これはあれだ、うん！」

「いや、どれだ。」

「さ、さあわからないな。そういえば、エイワスってどこかの軍事メーカーだった気がするな。何かしら企みでもあるのか？」

「ええっ！？　そ、そんな人聞きの悪い！」

駿河は悪あがきでエイワスに無茶振りするも、エイワスの慌てぶりからしてだいたいあっているらしい。

「そんなこと言ったら、ガーネット・ブラッドレイといえば、反重力ユニットの小型化とその浮上、生産の阻止に血道をあげていると聞いたような気がするが、この試験にそれらに関する利権でも絡んでいるのかな？」

「親父の話はやめてくれないか！　それとエイワス！　なんかもう敬語抜けて地が出てるぞ！」

四人が室内に揃ってからおよそ五分。

（（厄介な奴と同じ部屋になってしまった……！））

早速、それぞれに警戒心を抱いた三人だが、考えてることはだいたい同じであった。

「どうしたんだ、三人とも」

「……もういいよ、お前は！」

全く話についていけなかった一人を除いて。

## 一話（6）（前書き）

お詫び

改行後一文字目の一字空けや三点リーダー（『…』という記号です）の使い方の間違い、その他諸々にあった初歩のミスを気づいた範囲で手直ししました。

今までこうした基礎に全く気がつかなかったのは非常に恥ずかしいことだと思っています。

今後このような事が無いよう気を引き締めていきます。

## 一話（6）

「さて、皆さん」

時間は博士が 腕 を動かして見せた頃までさかのぼる。

博士は机から、ゲル状の半液体、金属光沢を放つ液体、そして澄んだ緑色の液体の入った小瓶を取り出した。

「このゲル状のものは医療用ナノマシンのホルダーみたいな物で、こちらは皆さんご存知水銀です。そしてこいつは…まだ秘密です。」

そして、透明な 腕 （サイズは人の腕そのもの）を取り出し、カメラでその様子をスクリーンに映した。

「はい、こちらは水銀とナノマシンが入っています。当然、ナノマシンと水銀ごときでは、何の反応もございません」

腕 に手をかざすなり叩いてみるなりして何も起きていない事を見せ、手に持った小瓶をカメラに寄せた。

「これを入れてみましょう」

腕 の小さな蓋を開け、小瓶の中身を全てほうり込み蓋をしてさっきのコードを繋いだ。

「それでは、グー、チョキ、パーの順番で動かしますから、よく見てくださいよ」

博士は深呼吸してから、 腕 を見つめた。

すると、 腕 は博士の宣言通りに手の部分でグーチョキパーをゆつくりと、しかし連続でかつ正確に作った。

「人は筋力や知力以外に様々な力を持っています。例えば、集中力と想像力。これは視覚化しにくいものですが、確かに存在しています」

博士は自分の頭を人差し指でコンコンと小突いて続ける。

「仮にこれらを違うエネルギーに変換出来たならば、いかに便利なことでしょう。人の想像力は底無しです。もしも、もしもこれをエネルギーとし、モーター等も組まずに稼動するならば。……これは

ある種の永久機関です」

言い切った博士は先程から目を離さずにまじまじとこちらを見て  
いる人々に、身振り手振りを大袈裟にして高らかと言いつつ放った。

「これが、これこそが、その永久機関です！ 想像力で動く金属塊、  
私はこれをイマジネーションでは語呂が悪いので、『I・M』（イ  
マジン・メタル）と名付けました！」

ざわめきを背にモニターに向き直った博士は理科室の人体模型の  
ような何かを映した。

「これはIMの内部図解です。パイロットには人間でいう心臓部で  
操縦をしてもらいます。」

#### IMの内部図解。

それはまるで人間から内臓と神経を除いた、つまり骨格、間接、  
筋肉、血管の数々であった。

「皆さん……想像して下さい。この十メートル強の金属塊は、たっ  
た一人の人間の想像力、そしてこの混合物で歩き、走り、跳びはね、  
泳ぎ、物を持ち運び、そして引き金を、引くのです……」

そして会議室は静寂に包まれた。

聴こえる音はきぬ擦れと唾を飲み込む音ぐらいである。

しかしそんなことはお構い無しと言わんばかりに、少し焦りを抱  
いた顔の桜田が博士に小声で話し掛けた。

「……博士、いいムードの中アレなんですけれど、時間押してます  
ので巻きでお願いします」

つい今までどこか陶醉している様に、しかし聴くものを引きずり  
込む様に語りかけていた博士だが、桜田に声をかけられると途端に  
普段の何だかやる気のなさそうな顔に戻った。

「うん、そうですね。あんまり早水のマネをするのも嫌ですし」

「早水？」

「こつちの話です」

そして人々に向き直る。

「つまり。この 血管 には先程の混合物が絶え間無く流れていま

す。こいつが 筋肉 に刺激を与える事により、さつき申し上げた様な多彩な行動を可能とするのです」

「やつつけになってません？」

「巻きで行きましょう、桜田さん」

桜田はキツパリと肯定した博士のその潔さとも言い難い何とも間の抜けた感じに、そういえばこんな人だったと苦笑いするしか無かった。

が、それと同時に博士が参考にした『早水』という人物に少し興味がわいたのであった。

## 一話（7）

視点は再び寮の一室に戻る。

相変わらず睨み合っていた三人だが、観念したのか、それとも何か企んだのか、とにかくオニキスが口を開く。

「コホン！ まあ、なんだ。いつまでもこんな感じじゃあ埒が明かない。この際、各々の立場を明らかにしようじゃあないか」

「えっ」

「いや、ちよつと待っ……」

オニキスは二人が何か言う前にさっさと語りだした。

「ただ今、親父とは仲が悪くてな。今回のコレも実験だから半ば無償だし、向こうにずっといるのも居心地悪くて来たわけだ。……ただ、それでも親父は尊敬してるんだ。話題ずらしとは言えあんな言い方は好きじゃないな」

言い終えた後、オニキスはエイワスにチラリと視線を注いだ。

「あっ！ す、すみません……」

「いや、構わない。ただ、この際だからエイワスにも色々話してもらおうかなあ、ってな」

慌てて頭を下げたエイワスに、オニキスは少しだけいやらしい笑顔を浮かべた。

「はあ……。そういう風に話されて僕が言わないのは、空気が悪くて嫌なんですよ」

「だろうと思ったよ」

本当に申し訳なさそうなエイワスに、オニキスがニツと歯を見せて笑う。

「ひどい人だ。……父さんの頼みがあつたんですよ、『俺によく似ている奴がいるから、どんな奴か見てきてくれ』って。内緒にしたかったのですが」

エイワスがため息をつくとき、一応は話を聞いていたロイが三人の



間にひよっこり首を出した。

「ちなみに、その『似ている奴』って、誰なんだ？」

エイワスは、ふと固まったように口の動きを止めたが、やがて重々しくそれを開いた。

「それが、何の因果か、ロイ君、まさしく君なんですよ」

エイワスは、困ったように苦笑した。

「お、俺か……」

ロイもロイで、鏡に映る自身の中途半端に伸びっぱなしの金髪と浅黒い肌を見つめ、その後にエイワスの短めの金髪と白い肌にまじまじと視線を送る。

「お母さんの血が、強いんだなあ！」

一同、ずっこける。

「……まあ、そういう事にして下さい。さすがにこれ以上は、ノーコメントです」

エイワスは、軽く笑ってから駿河に瞳を向けた。

「え、えと……その……」

駿河は途端にまごまごし出した。仕種が一々女の子らしい。

「わ、僕は何も隠して無い！……という事にしてくれ、頼む。この通り！」

突然、彼（？）が床に突っ伏した。土下座というやつだ。

「頼むよ……少なくとも、君達に危害があるわけでは無いんだ」

「……仕方ないなあ。そこまで嫌がるならさすがに俺もどうしようもない」

「僕も、何も聞きませんよ」

オニクスもエイワスも、笑って受け入れた。ただし、オニクスの瞳がカモを見つけた詐欺師の如き光を放っていることを駿河は知らない。

『聞こえますかー』

「……！？」

突然、駿河の後ろの壁に赤いランプが灯り、すぐ下のスピーカー

から博士の声が響く。

『……あー、テスト。被験生は、部屋に荷物を置いて一階の格納庫前に十分以内に集合。そうそう、部屋のタンスの中にM・XLサイズの着替えが四着ずつあるから、自分に合うやつを着用するように、以上！……あれ？ 桜田さん、切るときはどうするんだっけ？』

ハキハキと連絡していたはずの博士の声から急に覇気が抜けた。

『……このキューを下にやるんです』

桜田のため息がスピーカー越しに聴こえる。

『あ、そうだった？』

『そうだったじゃありませんよ、なんであなたが知らないんですか！』

『いやあ、使うの初めてなんだよね、実は』

『だったら、なんで僕を押しのけてまでやろうとしたんですか！』

博士、保護者の方々が帰ってからやる気を失い過ぎですよ！ だいたい……』

『桜田さん、マイクマイク』

『あつ！……コホン』

博士と桜田の漫才がプツリと切れた。

『……えっと、うん。タンスなんてあったっけ？』

『無かったと思いますけど』

オニキスは辺りを見回した直後、壁の少し前に立っていたエイワスの真後ろにそびえ立つそれに目が行った。

『お、おいエイワス』

『何です？』

『お前の、後ろ……』

『……あつ！』

そこにあつたのは、木目や淡褐色が風情を感じさせる、立派な桐タンスだった。

『……いつの間に……』

二人して、タンスを呆然と見つめる。

「ええい、何でもいい、開けちまえ！」

「ですね！」

エイワスは、観音開きをそつと開けて、中の袋を取り出した。

「袋の文字は、サイズの表記でしょうか？」

「だろうな」

各々、自らの分を袋から引っぱり出した。

「これは、ライダースーツってやつかな？」

「確かに、そんな感じですね……」

袋の中から出てきたのは、全身を覆うタイプの衣服で、黒を基調にしたその二の腕や太もも、へそ等にあたる位置についた白いハード・ポイントを無視すれば、確かにライダースーツといった感じである。

「どれ、さつさと着替えるか」

「ですね」

「俺も」

「あ、あのっ！」

いそいそと上着を脱ぎ始めた三人に、駿河がもじもじしながら声をかけた。

「どうしました、駿河さん？」

「トイレか？」

「……早く着替えないと、遅れるぜ？」

オニキスの顔が、悪役然とした笑顔を作る。

「そう、僕はトイレで着替えていたいなー、って……」

駿河の指が、バスルームを指す。

「えー、それは困るなー。どうやらこれは体と一体化するみたいだから、トイレ行きたくなつた時に全裸にならなきゃならんよねー」

「だ、だったら、今すぐトイレに行けばいいだろ！」

「いやあ、今は特に尿意は無いんだよー。けど、これから不意に訪れたら困るよねー」

「あ、あう……」

駿河が、ハイエナに囲まれた草食動物の如くへたり込む。

「どうするー？」

「うう……」

オニキスが獲物でじつくり遊んでいた頃、エイワスは部屋をいそいそと出て、ロイはさつさと着替えを済ませてドアの前にいた。

「オニキスも駿河ちゃんも、そろそろ行かんと間に合わんよ？」

「げっ、そんなにまずい？」

オニキスは時計に目を移し顔を青くした後、駿河を放って着替えを始める。

「た、助かった……」

ロイは、さつきまで自分が一番変な奴だった事を知ってか知らずか、二人を変な物に対する目で見つめ、ため息をついた。

「待っててやるから……」

「いやいや、すまない」

「え、えつと僕は……」

再び駿河がもじもじし出す。確かに、何も解決していない。

「いや、見ないでいてやるから早く着替えるよ」

「……ホントに？」

駿河がオニキスに疑いの視線を注ぐ。

「嘘ついてどうする。あと、多少おふざけが過ぎた、ごめん」

「……次は無いぞ」

オニキスと駿河は、脇目も振らずにスーツを着込んだ。

「まったく、お前らな。連帯責任とかは嫌だよ？」

「「あはは……」」

ロイが格納庫に視線を向かわせながらため息をつく。

「だいたい、さつきから駿河ちゃんにずっと絡んで、オニキスは男の裸を見て喜ぶ趣味なのか？」

オニキスと駿河が顔を見合わせる。

「……えつとツツコミ待ち？ あいつも今、駿河ちゃんって」

「いや、たぶん素だな。きつと、さん、君、ちゃんの分類を理解してないだけだろ」

そんな話をしていた二人をさておき、ロイは腕時計にチラリと目を移した。

「げっ」

残り二分。

ロイは、オニクスと駿河をぐいぐい引つ張った。

「オニクス、駿河ちゃんも、急ごう、時間無いぞ!」

「あ、ああ。すまない!」

「走った方がよさそうね」

三人は、力の限り走る。

「ところで、エイワスは?」

「……さあ?」

二分後、格納庫前。

「おや、皆さんお疲れですか?」

エイワスは、すでに部屋番号順の列の先頭にしれつと並んでいた。

「人間、限界超えれば窓からだって跳べるもんだね」

ロイがため息をつく。

「というか、エイワス、待ってくれてもいいだろうに……」

「いつの間にかいなくなっていたよね」

結局、三人はのこり二十秒前後で格納庫前に到着した。

「まあ、オニクス君が駿河さんをいじくり倒している頃には部屋を出ていましたからね。……あ、博士ですよ」

四人の視線が、徐々に上がるシャッターから、ペタリ、ペタリ、と響いた足音の先に向く。

「あー、お疲れさんです」

博士の気の抜けそうな声が、メガホンを通して響き渡る。

「それでは、早速ここを使って慣らし運転をしていただきますが、何か質問ある人」

エイワスが挙手する。

「……が出ないようにあらかた説明をします。……どしたの」

「いえ、なんでも」

なんだか居心地の悪そうな顔をしながらエイワスが手を下げた。

「……いらないうしよ今の間は、絶対！」

「俺に振るなよ！」

納得いかなそうな表情をオニキスに向けたエイワスに、オニキスがツツコミを入れる。

「あー、早速これから格納庫内のIMを使ってグラウンドまで行ってもらいまーす。制限時間は特に無し、ただし……」

博士のスウツ、という吸気がメガホンで増幅されて響き渡る。

「最後に到着した五名には、機体の掃除をしてもらう。メシ時まで仕上がらなかつたら、ご飯抜きね」

「は、博士！」

博士と一緒に格納庫から出てきた桜田が博士に怒鳴りかかる。

「どうしました」

「あくまで、彼らは実験を『受けてくれる』から 被験生 なわけであつて、学校の先生と生徒とは違うのですよ！？」

「……つまり？」

言葉の意味をイマイチ理解していない博士の様子に、桜田の眉間にシワが集まった。

「つまり、そんな横暴は通りません！」

博士は、首を傾げた。

「……学校でも、体罰はありませんよ？」

「んな事は知りません！ とにかく、無茶苦茶ですよ……」

桜田のため息は、メガホン無しでもよく聞き取れた。

「桜田さん、確かさつき、 天上都市 に連絡入れましたよね？」

「……？ はい」

「向こうつちの方々に、『どうせなら、エンターテイメントを多少盛り込んでもいいでしょうか』って確認取ったじゃあないですか。

ほら、大昔のバラエティ番組にもこんな企画が」

「これは明らかに拡大解釈ですよ！」

「いいですね、拡大解釈。大好きです、それに」

博士は桜田の話を適当に区切り、被験生達に向き直る。

「一応、忙しい軍人の方々の代わりにやってきたって名目なんだから、必死にやってもらわないとこつちが割に合いませんからね。桜田さん、いいデータ採れれば手柄ですよ？」

手柄、という言葉が、桜田の頭をぐるぐる回る。

「……あんまり度が過ぎると、上に報告しますからね」

「善処します」

博士が、再びメガホンを顔の前にやる。

「というわけで、今からスタート。先に車で行ってるから、よろしく！」

博士と桜田は、いつの間にか用意されていたドーム内用の電気自動車に乗り込んだ。

「頑張つてね」

博士の気の抜けた声援が、徐々に小さくなる。

あとには、被験生およそ七十人程が残った。

「まあ、メシもかかっているし、チャッチャと済ませますか」

オニキスが格納庫の奥に向かうのを見た被験生達が後からぞろぞろと入る。

「ひゃあ、実物はでかい……」

「迫力ありますね」

オニキスとエイワスが、揃ってIMの試作量産機　タイタン　を見上げる。

「なあ、乗り込んだ後に、ヘルメットを頭に付けるのはわかるが、このハード・ポイントはどうするんだ？」

駿河が二人に問い掛ける。

「さあ、よくわからん。そのうち説明があるさ。……にしてもエイワス、中々この服はピッチリしてるよな」

「えっ？ …… ああ、確かにピツチリしてますね」

「こつちみんなっ！」

駿河は、視線を彼（しばらくは彼としておこう）に向けた二人に側にあつたスパナを当たらないようにぶん投げて、機体各所にあるタラップから上っていった。

「まあ、俺達も乗るか」

「ですね。確か、起動にはカードキーが必要でしたね。オニクス君、忘れてませんよね？」

「まさか！ んな必須品、誰が忘れるかよ、ははは……」

オニクスがカラカラと笑う隣で、ロイの顔が青くなった。

「どした、ロイ？」

「部屋に服ごと置いてきた……」

沈黙。

「おいおい、どーすんだ！ というか、何でお前が忘れてるんだよ！」

「さ、さあ……」

「……先に行きますから、早く来てくださいね」

「うん、すまない」

起動して歩きだしたIMの間を縫いながら猛ダッシュで格納庫から出ていくロイを尻目に、二人もコクピットに乗り込んだ。

「さあて、いっちょやるか」

「ですね」

コクピット内は、いくつかの大きなパネルが周りを囲み、シート付近には思念で動くIMには必要なさげな何らかのレバーが数本ついていた。

「カードキーはさしたか！」

「はい、どうやら周りのパネルはモニターですね」

二人は、それぞれでマニュアルに書かれていた起動後の各種チェックをすませた。

「記念すべき」



「第一步！　って、うわっ」

二機のタイタンが、同時に足を踏み下ろし、何故かそこから無理矢理座ろうとし、体勢を崩してコンクリートに機体をたたき付けた。「……エイワス、大丈夫か？」

「ええ、今こいつ座りながら歩こうとしましたね」

起き上がろうと体をばたつかせていた二機を、側からもう一機が起き上がらせようとする。

「何やってんだよ……」

「ああ、駿河ちゃんか」

「助かりました」

オニキスのタイタンが単眼をつけた箱状の頭部をかく。

「しかし、こいつはこんな動きまで再現せんでも……」

「……わかった。オニキス、ハード・ポイントにチューブはさした？」

「いや……？」

「色々試したけど、どうやらコクピットについてるこれを差し込めば、頭の中の動き以外はある程度抑制できるみたい」

「そうなの？　あつ、シートの横にあったこれはそういう事か」

オニキスは、チューブの内二本を手取る。当然、タイタンの腕もそれに続く。

「させばいいんだな！」

「うん」

「よし、まずは脚からか」

オニキスが太もものハード・ポイントにチューブをさしこむ。すると、タイタンはイメージ通りにスツと立ち上がった。

「おっ、立った、やった！　はっははは」

続けて肩甲骨、二の腕等にチューブをさしていき、ついにタイタンはまともな動きをした。

「次からは起動前にやるか、チューブ絡まったし」

「ははは、ひょっとして、博士は僕らに失敗してもらうために意図

的にこれを言わなかったのかもしれませんが」

既にチューブをさし終えていたエイワスが、オニキスに笑いかける。

「確かに、僕が二人に気づいた時には、まだ手こずっているのかもしれないなあ。……ところで、ロイを見かけないけど、もう行っちゃった？」

「ああ、それがあいつ……」

オニキスは、事の顛末を軽く駿河に話した。

「それは、大変だな」

「だろう？ まあ、あいつの分も頑張ろうぜ」

「助けてやらなくちゃ」

「……えっ？」

駿河の口から出た意外な一言に、オニキスは首を傾げた。

「だって、いくらなんでも可哀相だろ？ それに、走って二分、グラウンドの方が遠いくらいだ」

「まあ、な」

オニキスは「仕方ない」と心の中で唱え、乗り手のいないタイトンの右腕を引っ張り上げる。

「エイワス、手伝ってくれ」

「僕ですか？ ……わかりました、やりますよ」

エイワスも左腕を持ち上げて、「一、二の三！」の掛け声で互いに腕をそれぞれのタイトンの肩にかけた。

「ははは、酔っ払いの送迎ですね」

「確かに、ははは……」

「オニキス、エイワス君、どっちか代わるよ。言い出しっぺのわ……僕が何もやらないのも、あれじゃないか」

駿河のタイトルが近づく。

「いや、お構いなく」

「女の子に無理はさせないさ。私って言いかけてたぜ」

「……うるさいな！」

「やーい、怒った！ 逃げろ逃げろ！」

「ですね！」

「小学生か！」

二機のタイタンは、駿河のタイタンに追いかけられながらロイを迎えに走った。

その頃、グラウンド。

「……桜田さん」

「どうしました？」

被験生より一足早く到着していた博士が桜田に話し掛ける。

「格納庫からここまでなんて、初操縦でまともにやれる奴なんざ化け物でした」

「えっ」

「いやあ、忘れてた。ロイのデータで計算していたから、完全に失念していましたよ、ははは」

博士は特に悪びれずにへらへら笑った。

「じゃあ、どうするんですか！」

「いやあ、まいりました。ははは……」

「ああ、もうっ！」

桜田の怒号が、グラウンド中に響き渡った。

## 一話（8）

駿河の計らいで三人がロイの分のタイタンを運んでいた頃、彼はやつと部屋の前になどり着いた。

「俺は、何やってんだか」

ため息をついてガチャリ、とドアを開く。すると、目の前に広がる桐タンス。

「タ、タンス……」

「ひゃっ！ え、えつと今は訓練だか試験だかじゃあ……」

ロイがタンスから目を離し、声の方へやると、どうやら小柄な女の子一人で、これを運んでいるようだった。

頭に青いバンダナを巻いた、長い銀髪の女の子だった。

「えつと……こんにちは？」

「ち、ちわっす」

女の子は少し威勢のいい挨拶をした後、急な出来事に視線をうつかせていた。

「あつ、手伝うべきかな？」

「やつ、心配いらねっす！ お客さんは、どうぞ、おくつろぎになつてくださいます」

「まあまあ、そう言わずに」

とりあえず、二人でタンスを廊下に運び出す。

「うーん、どうりで掃除が行き届いてると思つたら」

「そりゃあ、お客さんに見つからないように、わりとこっそりやっていきますから……」

女の子は未だにそわそわとしていた。

「あ、あの、そろそろいいですか？」

「この後も何かあるの？」

ロイが女の子を覗き込む。

「ま、まあ他の部屋のタンスもみんな運ばなきゃいけないので、

忙しいというか、その」

「手伝うよ。どうせ、この分だとビリは確定だ」

「やつ、滅相もねっす！ お客さんに万が一があったら……」 女  
の子が震え上がる。

「なんだよ、同じドーム市民なのに、冷たいなあ」

「……へ？」

「だから、俺もここ出身。お客さんなんてかしこまるなよ」

ロイは部屋に入り、自分の着替えを漁りながら女の子に話しかけた。

「よ、よかった……」

「何が？」

「いや、もしも因縁付けられて色々されたら、と思うと怖くて怖くて……」

「色々が何かはサッパリわからないけど。もし、例えばドーム市民な俺が色々したら？」

「やっと見つけたカードキーを片手に、ロイが女の子に問い掛ける。」

「えっと、ためらわずに首の骨を折るっす」

「な、なるほど……」

腕をクイツとやって何かをへし折るジェスチャーをした女の子にロイが苦笑した。

さっきまでその細い腕で軽々とダンスを持ち上げていたので中々シャレにならない。

「まあ、なにせよ自分達で人手は足りてるので、えっと……」

「ロイだよ。十五歳」

ロイは、彼を見て首を傾げた女の子に軽く自己紹介した。

「ああ、自分の方が一つ上っすね。リーっす、よろしく」

「よろしく」

「とにかく、博士のためにもビリだろうとちゃんと訓練だか試験だかはやるっすよ？」

リーと名乗った女の子はロイを見上げながら諭すように言った。

「そうだね。ちょうどお目当ての物も見つかったし」

ロイは手に持ったカードキーをヒラヒラと振った。

「さて、また格納庫までダッシュか……」

「ローイ！」

ロイがため息をついた矢先、オニキスの声が玄関近くから響いた。

「あれっ、オニキス。……あいつら、何やってんだ？」

窓から光景を覗いたロイは、酔っ払いみたいに二機のタイタンの肩に垂れ下がっているタイタンに目がいった。

「持ってきてやったぞ！」

「早く来てくださーい！」

「ああ、なるほど。……いい奴らだなあ」

納得したロイはリーの方へ向き直る。

「それじゃあ、またいつか」

「は、はい、よろしくつす。……そうそう、自分達のことは、他言無用つす」

リーの台詞に、ロイは首を傾げた。

「どうして？」

「こういう掃除とかを自分達がやっているのがばれたら、天上の人が不愉快になるそうで、博士からもばれないように言われたつす」

「あ、そうか」

天上都市の人間はどこか潔癖なところがある人が多く、土民（天上都市民のドーム市民への差別用語、彼らがドーム市民を略す時に使われている）が自分達の身の回りを管理しているなんて聞いたら、怒り狂う人もきつといるだろう。オニキスみたいにフランクなのは、むしろ例外なのだ。

「約束するよ、リーちゃん」

「ありがとつす。……初対面でちゃん付けだなんて、中々馴れ馴れしいつすね」

「そういうもののなの？」

「……まあ、次に会ったら教えてあげるつすよ。ほら、急いで」

リーが、せかすようにロイの背中を軽く叩く。

「さよなら、えっと、ちゃんがダメなら……リー君！」

「それもそれでアレっす！……って、行っちゃった」

リーは、疾風の如く玄関へ駆け抜け抜けるロイの背中をしばらく眺め、ハッと自分の仕事を思い出した。

「タンス、自分の仕事はあと三個っすね。博士も博士で、運ぶの大変だし普通に服を置くだけじゃいけないんすかねえ……？」

彼女は大きくため息をつきながらタンスを抱え上げた。

「すまない！」

ロイは、玄関前に集まった三機のタイタンに頭を下げた。

「いやいや、構わないよ。せっかく同じ部屋になったんだ、助け合わないと」

奥のタイタンから駿河の声が流れた。

「ありがとう。さあて……」

ロイは、慣れた感じでひよいひよいとトラップを登っていき、コクピットに入り込んだ。

「やりますか！」

チューブを各所に挿しこみ、カードキーで起動を完了させる。

ブウン、という音を立ててタイタンの単眼に光が灯る。

「おお、無事起動したか！」

「さすが、慣れてますね」

二機のタイタンから離れ、ロイのタイタンが直立した。

「まあ、十年間やって起動に手間取るのは馬鹿だな」

ロイは、「カードキーは忘れたけど」と心の中で付け足して笑った。

「待たせてすまない」

「グラウンドまで急ぐか？」

「いや、歩いた方がいい」

ロイは、オニキスの問いに彼が想像していなかっただろう案を提

言した。

「それまた、どうして？」

「なに、今にわかるさ」

「そうか」

三機のタイタンがロイの機体が続いてグラウンドへと歩き出した。

その頃、グラウンド。

「だいたい、どうしてここに着かないとわかるのですか？」

桜田が博士に疑問を投げ掛ける。

「IMはですね、人の意思と精神力を『吸って』動いています。つまり、慣れない内はどうしても吸い口に意識を注ぎすぎてしまうものなんです」

「へえ……」

「余計な力がかかりすぎて、イメージが散漫になり動きが鈍くなる。イメージ通りに動かないので、余計な力がかかってしまう」

「堂々巡りですね」

「本人はそれに気づかないから泥沼に嵌まってコクピットという不自由な空間で無理して息巻いて、当然衰弱する。……慣れれば問題は無いのですけれど」

一連の説明を聞いた桜田が、ハッと何かに気づいた顔をした。

「……つまり、今回はまさに『慣らし』運転なんですね」

「桜田さん、中々シヤレが効いてるじゃないですか！ ははは……」

一通り笑った後、博士は車の後部席に寝そべった。

「しばらく寝てます。三十分して誰も来なかったら、起こしてください」

言い切るや否や、桜田の返事も聞かずに博士は眠りについた。

ドーム内の人工灯は、ちょうどお昼時少し前を演出していた。うらかな陽射し（を模した光）、退屈感、その他諸々。桜田も少し眠くなってきた。

その時、まぶたを閉じかけた桜田の瞳に陽炎と共にタイタンが一



機、確かにこちらに歩いて来ていた。

「あれ？……博士！」

すやすや寝ていた博士をたたき起こす。

「んあ、どうしました？」

「見てください、IMが一機こつちに来ます！」

博士も視線を入り口に移す。

「ロイかな？ いや、歩き方の癖が違う」

「そういうものですか？」

一挙一動に目をやる博士に、桜田は「またでたらめ言ってるだけじゃ無いのか？」といった内心を滲み出させながら問い掛けた。

「ああ。あいつ、アレに乗るとどうも右脚が左脚より少しだけ上がりますから。人をたくさん呼んだのも、あいつのデータを全て反映させるのは問題だからです」

「なるほど…… あつ、降りてきましたよ」

博士達の目の前でコクピットのハッチが開き、内蔵のスロープで被験生の一人が降りてきた。

「名前は？」

「被験生、グン・コプスであります！」

博士の問いにグンと名乗った青年はハキハキと答える。

「博士、グン・コプスと言えば、被験生で唯一の軍人ですよ」

「へえ、見た目は皆と一緒になのにね」

桜田の耳打ちに博士は目を丸くした。

「親の、七光りでございます！」

グンは特に恥じるでもなく言いきった。

「今、何歳だっけ？」

「ハッ、今年で十八となります！ 今回の試験には、『万が一の機種転換時に対応できる人物が一人でもいるべきだ』と父さ……いえ、少将殿の推薦でまいりました！」

「まあ、そうしゃちほこばるなよ。歳も三つしか変わらないし」

「ハッ、三つと言っても、目上ですので！」

やりにくい人だな、というのが博士の彼に対する第一印象だった。  
「しかし、お父さんの物言いはIMを全く信用していないね。軍から君しか来ない理由がよくわかるよ」

「ハッ、それについて少将殿は、『人の意思なんて脆弱な物で動く機械など、信用に足り得ない』と申しておりました」

「ハッキリ言うねえ……」

残念そうな顔をした博士だが、内心は現場の認識とそれをどうやってひっくり返してやれるか、という考えでいっぱいになっていた。  
「あ、そうだ。ロイ、つまりウチのテストパイロット見なかった？もうすぐ来てもいい頃合いだけだ」

「ハッ、自分が発進した時点では、『カードキー、カードキー』と呟きながら格納庫から寮へと向かっておりました」

「何やってんだ、あいつ」

グンの報告に博士は顔をしかめた。

「まあ、いいや。ちょっとトイレ」

博士は、二人を残して近くの建物に足を運んだ。そして中で無線を手にとると、誰かと通信を始めた。

「芦岡だ。IMをそのままにしておくわけにも行かないよな。回収班の出番あるかも、準備よろしく」

『了解！』

無線の向こうから快活な声が博士の耳に響く。

「頼りにしてるよ」

『……三年前のアダム坊以来か』

博士は、一拍置いて再び無線を口元にやった。彼の顔は、先程の力が抜けそうなノンビリした感じからは一変して瞳には鋭い光が灯った。

「アダムじゃない、ロイだ」

『あの時まではアダム坊だった』

「ギルバートさん！」

博士が無線に怒鳴り込む。

『……失礼。これより我が隊は、行動不能になった各IMの回収に向かう。では!』

無線から返ってきた声は、どこか寂しげだった。

「さて、あいつはどうしたのやら」

博士は無線を切ってグラウンドの入り口に不安げに目をやったが、未だにグン以外の到着者はいなかった。

寮からIMで歩きだしたオニキス達は道中で異常な事態に遭遇した。

IMがグラウンドに向かうにつれて一機、また一機と倒れ伏すか座り込むかして、つまりグラウンドへの到着を諦めていたのだ。

「なんじゃこりゃ……」

オニキスは試しに倒れていた一機に蹴りを入れた。

「な、なんだ?」

中から不安げな声が帰ってくる。中に人はいるようだ。

「ロイ、お前が言ってたのはこれか?」

「ああ」

ロイはメインモニターの左端についたレーダーに目をやると、手元の青いスイッチを押した。

IM用のスーツに『思考遮断チューブ』を接続するハード・ポイントがついている理由は、大まかに二つ。

一つは、シートに座るパイロットの負担の軽減。先程のオニキスのような頭をかく等の動きが機体に反復されないようにするため。

そしてもう一つ、IMに使う思考と手足に使う思考を分断することで、多くの目的に対応するオプションを増設できるという利点だ。

IMタイタンには、オプションとしてドーム番号85、つまり当ドームの全地形が詰まったレーダーが積まれている。

ロイがレバーの青いボタン、つまり『レーダーのズームアウト』機能を使うと、グラウンドまでの大まかな道筋と、そこに続く六十数個の赤い点が表示された。

「全体の過半数はこの分だとリタイヤか。……おつ、一人グラウンドについてる。すごいなあ……」

「おいおい、つまりどういうことなんだよ？」

一人で納得しているロイに回線越しにオニキスが問い掛ける。

「イメージが散漫になると思うように動かないんだよな……」

「そんなもののなか？」

「あんまり走らない方がいいね、これは。三人とも、まずは『歩く』ことだけを考えて」

四機のタイタンが辺りを見回しながら歩いていて、先頭、ロイ機の動きがピタリと止まった。

「どうした」

「大きな反応が……こっちに突っ込んでくる！」  
「なにっ!？」

突如としてロイ達のすぐ背後を輸送機が滑走して通り過ぎた。

「うわっ！」

「建物に……ぶつからない！」

建物の目の前でなんとか止まったその中から、赤いペンキで『回収班』とでかでかとかかれた人型機械がぞろぞろと降り立つ。

黒系の色をベースに、頭はそのまま胴体に生えていて、腕は蛇腹状にいくつも関節が連なっている、とにかくタイタンとは構造がまるで違う機体だった。

「うわっ、なんだ!？」

「いったい誰なんだ!」

それらが、特に何を言うでもなくテキパキと輸送機に行動不能になったタイタンと中の被験生を詰め込んでいく。

その中で一機だけ色合いの違う錆色の機体が、全ての行動不能機の回収を確認して右手を振り上げた。すると、黒い機体達は一斉に輸送機に帰還していき、輸送機は全速力で格納庫方面に消えていった。

「……結局、何だったんだ？ あの人達」

「そのまま格納庫に持ち帰るんじゃない？ 回収班って書いてあったし」

「あそこまで大袈裟にやる必要あるかな」

ロイの推測に駿河が呆れ果てたようにため息をついた。

「うつつ、しかし中々疲れるな、イメージがモヤモヤしてきた……」

駿河の声から力が無くなっていく。

「まあ、疲れない程度に急ぎましょう。この歩幅なら、歩いてもあと十分です」

「げっ、十分もこの中に閉じこもりっぱなしかよ！」

オニキスはエイワスに文句を言いながら自機の手で駿河機の手を引いた。

「オニキス？」

「ささ、お嬢さん。ここは俺に任せてくれ」

「ば、馬鹿にするな！ 僕だって、まだまだ出来るさ！」

駿河機がそれを振り払いズンズンと先を急いだが、突然体勢を崩して前のめりに倒れ込んだ。

「ほら、無理するな」

「すまない……」

駿河機は、追いついたオニキス機に手を差し延べられて力無く立ち上がる。

「エイワス、ロイ！ 俺は大丈夫だが、お前らは？」

「大丈夫……だと思う」

「僕は平気ですよ」

二人の確認を取ると、オニキス機が駿河機の前に座り込んだ。

「俺に考えがある。その名も……」

一方、グラウンドには博士が帰ってきていた。

「長いトイレでしたね」

「いやあ、ケツと死闘を繰り広げて来ましたよ」

博士はカラカラと笑って辺りに視線を泳がせた。

「相変わらず、グン以外は来ませんね」

「そうですね。ところで、行動不能になったIMはどうします?」

桜田は『理想の出世論』といういかがわしい本を読みながら、暇そうに博士に問い掛けた。

「桜田さん、昔話で小さなオッサン共が靴屋のおじいちゃんを手伝う話がですね……」

「つまり、何も考えていないわけですか?」

「いやあ、そんな事はありません」

桜田は博士の自信ありげな表情を疑わしそうに見つめた後、再び謎の本に意識を集中させた。

「まったく、話くらい聞いてくださいよ」

「実にもならない話でしょう?」

「ははは……」

博士は苦笑して、微妙な空気からグラウンドの入り口に目をそらし、入ってきた光景にその目を見開いた。

「……桜田さん。騎馬戦、騎馬戦です!」

「今度はなんですか!」

「いいから、グラウンド!」

「えっ……あ、ああっ!?!」

桜田は苛立ちながら博士の指さした方向に目をやり、博士同様に仰天した。

一機のタイタンの両脚を二機がかりで支え、残った一機が背中を押さえている。

「タイタンが、騎馬戦の陣形でこっち来てますね……」

「だから、言ってるじゃないですか。あっ、左脚を支えているのはロイだ!」

ついに四機のタイタンがグラウンドに到着した。

「しかし、何故騎馬戦……?」

「ははは、どうだ! これなら駿河ちゃんも大丈夫だぜ!」

オニキスが出した案は、一応それなりの結果を収めた。

「三人とも、ゴメン……」

一番上で動きを止めている駿河機から、彼の申し訳なさそうな声が聞こえた。

「いいっていいって」

「困った時は助け合い、ですよ」

「……お前ら、絶対何か企んでるだろ」

「あ、ばれた？」

「惜しいですね、あと一步」

駿河は、二人のわざとらしい態度に恩人とは言えツツコミを入れた。

「お前らなあ。……ロイ、大丈夫？ 息切れしてるけど」

「え、ああ、大丈夫……じゃないな。物を抱えて歩くイメージって難しいかな」

ロイは、駿河に指摘されて初めて自分の肌を伝う汗や心臓で唸る激しい動悸に気がついた。

「オニキスとエイワス君は平気？」

「特に問題はないけど」

「同じくです」

オニキスもエイワスも、初めての割には特に疲労した様子は無かった。

「とりあえず、いいかげん駿河さんを降ろしましょう。ほら、博士がカメラ回してますよ」

「げっ、一生涯の恥になってしまう！」

駿河機が慌ててグラウンドに飛び降り、顔面から着地した。

「なにやってんだ、ははは」

「焦りすぎですね。ほら、カメラカメラ」

「う、うるさいな！」

機体を起き上がらせた駿河はだいぶ回復したのか、そのまま二人を追いかけた。

その様子を眺めていたロイは、三人のタフネスに驚きつつ、彼らに言葉にしがたい不条理感を抱いた。

「……なんだか、ふに落ちない」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6167y/>

---

天地物語

2012年1月8日22時53分発行